

山名会歴史講演会「応仁の乱と山名宗全」

山名宗全の虚像と実像

国際日本文化研究センター助教 呉座勇一

山名宗全のイメージ

☆『塵塚物語』の逸話「山名宗全、或る大臣と問答の事」

- 「山名金吾入道宗全、いにし大乱の比をひ、或大臣家にまいりて、当代乱世にて、諸人これにくるしむなど、さまざまものがたりして侍りける折ふし、亭の大臣ふるき例をひき給ひて、さまざまかしこく申されけるに、宗全たけくいさめる者なれば、臆したる気色もなく申侍るは、『君のおほせ事、一往はきこへ侍れど、あながちそれに乗じて例をひからせらるる事しかるべからず。凡そ例といふ文字をば、向後は時といふ文字にかへて御心えあるべし。それ一切の事はむかしの例にまかせて何々を張行あるといふ事、此宗全も少々はしる所也…（中略）凡そ例と云は其時が例也。大法不易、政道は例を引て宜しかるべし。其外の事、いささかにも例をひかるる事心えず、一概に例になづみて、時を知らざるゆへに、あるひは衰微して門家とぼしく、あるひは官位のみ競望して其知節をいはず、此くの如くして終に武家に恥かしめられて、天下うばはれ媚をなす。若しみて古来の例の文字を今沙汰せば、宗全ごときの匹夫、君に対して此くの如く同輩の談をのべ侍らんや、是はそも古来いづれの代の例ぞや、是則時なるべし…（中略）いまよりのちはゆめゆめ以てこころなきゑびすにむかひて、我方の例をのたまふべからず。もし時をしり給はば、身不肖なりと云ども宗全がはたらきを以て尊主君公みな扶持したてまつるべし』と苦々しく申ければ、彼大臣も閉口ありて、はじめ興ありつる物がたりも、皆いたづらに成けるとぞ、つたえきゝ侍し、是か非か」

- ◎山名宗全がある大臣の邸宅に訪れ、昨今の乱世について語り合った。大臣は昔の例を縦横に引いて持論を「賢く」語った。これに苛立った宗全は「あなたのおっしゃることにも一理ありますが、いちいち過去の事例を挙げて自説を補強するのはよろしくありません。これからは『例』という言葉に替えて『時』をお使いなさい。『例』は所詮その時の『例』に過ぎません。昔のやり方にとらわ

れて時代の変化を知らなかったから、あなたがたは武家に天下を奪われたのです。私のような身分
いやしき武士があなたのような高貴な方と対等に話すなど過去に例がないことでしょう。これが
『時』というものです。あなたが『例』を捨てて『時』を知ろうとなさるなら、不肖宗全があなた
をお助けしましょう」と反論した。→**旧来のしきたりに縛られない変革者**のイメージ。

☆「赤入道」

- 『続群書類従』「山名系図」：「宗全面色、甚だ赤し。世人呼んで曰く、赤入道」
- 『応仁別記』：→「ウテ（討て）ナクハ ヤメヤ山名ノ赤入道 手ツメニナレハ 御所ヲ頼ヌ」
山名宗全邸への挑発の矢文。
- 一休宗純『狂雲集』：「山名金吾は鞍馬の毘沙門の化身、鞍馬の多門は赤面顔」

☆「濫吹を表す輩」—**実力至上主義者、秩序破壊者**というイメージ—

- ◎『建内記』嘉吉元年七月十二日条：山名宗全の家臣たちが軍用金徴収と称し、京都の土倉に乱入。
「山名の濫吹、以ての外の次第なり。管領（細川持之）より度々濫吹を止むべきの由、使を立つる
の処…（中略）更に制止の下知に及ばざるなり…（中略）所詮山名の許に寄すべきの由、管領支度
の処、今夕の儀、被管人無道の沙汰なり、首を切るべきの由、山名これを謝す。仍って無為に属す
とうんぬん。近日無道・濫吹、ただ山名に在るなり」
- ◎『建内記』嘉吉元年閏九月九日条：赤松氏滅亡後の山名宗全の横暴。
「山名右衛門佐持豊、播州に在り。濫吹・狼戾（ろうれい）、以ての外なり。赤松を滅ばすは我が
功と称し、守護職を望み申し、裁許に及ばざる時分なり。寺社・本所・武家の人々の所領・年貢等
を奪い取り、猛悪度なしとうんぬん。彼もし守護に補さば、一国滅亡すべきかとうんぬん」
- ◎『建内記』嘉吉元年閏九月二十日条：天皇に播磨の寺社本所領の侵略禁止命令を出してもらおう？
「礼儀を存ずるの輩<管領・畠山の如しとうんぬん>は元来子細なし。濫吹を表すの輩は、縦い勅定
と雖も、更に承引すべからず。然らば勅定かえって軽きに似るか」

☆早島大祐『足輕の誕生』：「広大な分国を支配していた山名持豊は地方派」「実力者ながら非主流派」

山名宗全の野心が応仁の乱を引き起こした

★通説的理解：将軍家の家督争い。8代将軍足利義政の後継者の地位を義視（弟）と義尚（子）が争う

●室町幕府の8代将軍足利義政には息子がいなかった。

⇒寛正五年（1464）十二月、義政は弟の浄土寺義尋を還俗させ（義視）後継者とした。

※涉る義視に対し将来男児が生まれても出家させると誓う。

⇒義政は細川勝元を義視の後見人とする。

⇔翌年十一月に義政の正室である日野富子が男児（のちの義尚）を出産。

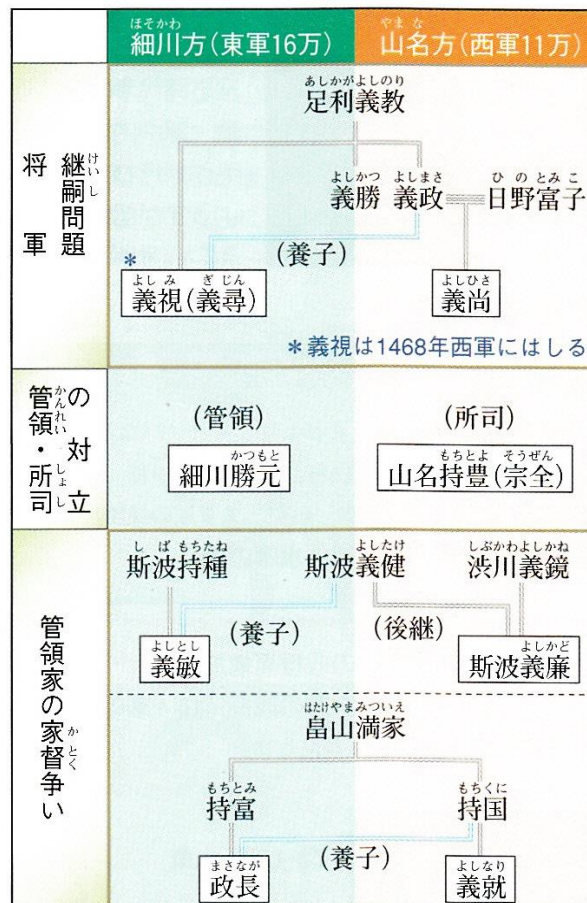
⇒富子は我が子を将軍にしようと画策（**日野富子悪女説**）。

細川勝元のライバルである山名宗全に義尚の後見人となるよう依頼。

●細川勝元・山名宗全という幕府の二大実力者が**将軍家の御家騒動**に介入→応仁の乱が勃発。

細川勝元が東軍、山名宗全が西軍を組織し、応仁元年（1467）～文明九年（1477）の11年間にわたり合戦。

応仁の乱の対立関係



☆足利義視と足利義尚の関係

◎還俗以後、義視は順調に官位昇進。還俗直後は従五位下・左馬頭（左馬頭は足利直義が就任したのを嘉例とし、副将軍的存在あるいは次期将軍が就任する官職とみなされた）だったが、義尚誕生後の寛正六年十二月十七日には従三位・権大納言に。

◎寛正六年七月、義視は富子の妹良子を正室に迎えており（両者の結婚は富子の妊娠中）、富子が義視を敵視していたとは考えにくい。

⇒義尚成長までの中継ぎとして義視の将軍就任は既定路線となっており、

富子も容認か。義政は「大御所政治」を構想しており、義視→義尚という継承に不安要素はない。

☆文正の政変

◎文正元年七月三十日、日野良子が男児（のちの足利義植）を出産。

◎日野富子の思惑：足利義尚はまだ幼児で早世の可能性あり。義尚が亡くなった場合は日野家の血を引く義材が将軍になるのが望ましい。そのためには義視と良好な関係を築いておくことは重要。敵視はありえない。

◎伊勢貞親の思惑：足利義政の側近であり、義尚の乳父である貞親にとって、自分と関係のない義視の将軍就任は避けたい。足利義政→義尚という将軍継承が望ましい。

⇒文正元年九月五日の夜、「足利義視に謀反の疑いあり」と讒言。

これを信じた足利義政が義視を誅殺しようとする。

◎伊勢貞親の誤算：赤松氏問題などで関係がギクシャクしていた細川勝元と山名宗全が反貞親で共闘。

⇒足利義視はまず山名宗全、ついで細川勝元に助けを求めた。

⇒翌六日、山名・細川ら諸大名の抗議により、伊勢貞親・季瓊真薬・斯波義敏・赤松政則ら義政の側近たちが失脚（『後法興院記』『大乘院寺社雑事記』『経覚私要鈔』）。

⇒細川勝元邸に入った足利義視が事実上の将軍として政務を行い、山名宗全と細川勝元の二大大名が「大名頭」として義視を支える暫定政権が成立。

◎**山名宗全の思惑**：季瓊真薬・赤松政則ら義政の側近集団を一掃した勢いで、自身を嫌う足利義政を引退に追い込み、義視を将軍にする。

◎**山名宗全の誤算**：細川勝元の説得により足利義政が将軍職に留まり、細川勝元と管領の畠山政長が義政を支える政権が成立。

⇒山名宗全は幕府内において依然として二番手、三番手の大名。

◎細川勝元は山名宗全の養女を妻としており、両者の関係は当初良好。

←畠山氏と対立する細川氏、赤松氏と対立する山名氏の双方にとってメリットのある同盟。

◎赤松氏再興に細川勝元が同意したことで、山名宗全は勝元に不信感。

⇒足利義視の将軍就任を阻止した勝元の行動は、宗全から見れば自身を政権から排除する陰謀。

⇒クーデターへ。

☆山名宗全のクーデター

◎**山名宗全の計画**：最強武将である畠山義就を京都に呼ぶことで細川方を上回る戦力を京都に集める。
その軍事力を背景に将軍足利義政に、畠山政長の管領職罷免を要求。

◎文正元年十二月二十六日、山名宗全の呼びかけに応じ畠山義就が軍勢を率いて上洛、
京都北部の千本釈迦堂（大報恩寺）に陣を構える。

◎翌文正二年正月六日、義政は政長を管領職から罷免し、屋敷を義就に引き渡すよう命じた（義就が畠山氏当主に）。

⇒八日には斯波義廉（山名宗全の娘婿）が管領に任命され、十一日には新管領義廉の出仕始。

（『後法興院記』『大乘院寺社雑事記』『経覚私要鈔』）

◎十一日には義視が正二位に昇進（武家で義視より上なのは、従一位左大臣の義政のみ）。

⇒**足利義視の将軍就任（＝山名宗全政権の成立）**は時間の問題に。

◎**細川勝元の計画**：軍勢を率いて将軍御所に押し寄せ、強引に義就討伐命令を引き出す。

⇔勝元夫人（宗全養女）から計画が漏れ、山名宗全らが警備を名目に御所を占拠。（『経覚私要鈔』）

◎十六日、宗全は義視ら足利一族を勝元らに奪われないため将軍御所に移す。（『経覚私要鈔』）

☆御霊合戦

◎山名宗全の予測：失脚した畠山政長は京都を去り、本国で謹慎するはず。

⇒畠山政長は京都に留まり徹底抗戦の構えを見せる。

◎政長は十七日夜、屋敷に自ら火を放って北上、糺河原（賀茂川と高野川の合流点に広がる河原。「鴨河原」ともいう）を經由して、十八日の明け方には御所北東の上御霊社（現在の御霊神社）に陣を取った。（『後法興院記』『大乘院寺社雑事記』『経覚私要鈔』）

⇒糺河原から東に向かって京都を出ると見せかけて、逆に西進して將軍御所をうかがう構えをとった。

⇒京極持清は御所の南に、細川勝元は御所の西に布陣し、宗全らがたてこもる御所を包囲した。

◎合戦に巻き込まれることを恐れた足利義政は、山名・細川両名に対し両畠山への軍事介入を禁じ、義就と政長に一对一の対決をさせようとした（『大乘院寺社雑事記』『経覚私要鈔』）。

⇒十八日の夕刻、畠山政長が布陣した上御霊社に畠山義就の軍勢が押し寄せた（『後法興院記』）。

⇒細川勝元は義政からの命令に従い、政長に加勢しなかった。

◎細川勝元の予測：山名宗全も將軍の命令には従うはず。

⇒山名宗全・斯波義廉は義就に加勢した（『大乘院寺社雑事記』）。

⇒政長は敗北し、勝元の屋敷にかくまわれた。

⇒山名宗全が幕政を掌握。

◎山名宗全の誤算：畠山政長の拘束（殺害）に失敗。



☆応仁の乱へ

◎山名勢の参戦によって、勝元は盟友の政長を見捨てた形になり、世間の評判を落とした

(『大乘院寺社雑事記』)。

◎山名宗全の誤算：細川勝元は畠山政長を復権させるため反撃を計画。ひそかに兵を京都に集める。

◎五月二十六日の午前中に細川派の武田信賢・細川成之が將軍御所の向かいにある一色義直の屋敷を襲い、屋敷に火をかけられた義直は山名宗全の屋敷に逃げ込んだ。

(『宗賢卿記』『大乘院寺社雑事記』『経覚私要鈔』)

◎山名宗全の誤算：全面戦争を想定していなかったため、軍勢の召集で遅れをとり、京都で苦戦。

山名宗全の実像

☆山名宗全の守旧性

◎管領を輩出できる家は細川・畠山・斯波の三家という慣例にしたがい、娘婿の斯波義廉を管領に。

◎西軍は管領斯波義廉・畠山義就・山名宗全・一色義直・畠山義統・山名教之・山名政清・土岐成頼の大名8人が連名で命令を下した。

⇒西軍の最有力大名である大内政弘を、家格を理由に署名者から排除。

☆山名宗全の都市性

◎文安元年(1444)五月二十六日～二十八日、山名氏の菩提寺である梅津長福寺の来迎堂を造営するため、山名宗全が土御門河原で勧進猿楽を開催。宗全は万里小路時房を栈敷に招待。(『建内記』)

◎文安四年八月十九日、山名宗全が細川勝元を自邸に招き、犬追物・猿楽でもてなす。(『康富記』)

同六年閏十月五日には宗全が勝元邸に招待され、犬追物を見ている。(『北野社家日記』)

◎連歌七賢の一人である高山宗砌は、山名氏の家臣である高山氏の出身であり、宗全と親しかった。

享徳三年(1454)十二月、足利義政から隠居を命じられた山名宗全が分国但馬に下向すると、宗砌も但馬に下り、翌年但馬で死去している。

和睦交渉と山名宗全

☆山名宗全はなぜ和睦を模索したのか？

◎応仁2年（1468）後半の時点で東軍の赤松政則が山名氏一族から旧赤松氏分国を奪還。

◎西軍の朝倉孝景が東軍に寝返り。文明3年（1471）8月24日に西軍の甲斐方と戦い、大勝利を収めた。（『朝倉家記』）

◎文明3年9月、伯耆守護山名豊之が家臣によって殺害される。（『大館持房行状』）

同年11月、因幡守護山名豊氏が戦死し、子息が東軍に寝返る。（『昔御内書符案』）

⇒文明4年正月、山名宗全が東軍に降参するとの噂が流れる。（『親長卿記』）

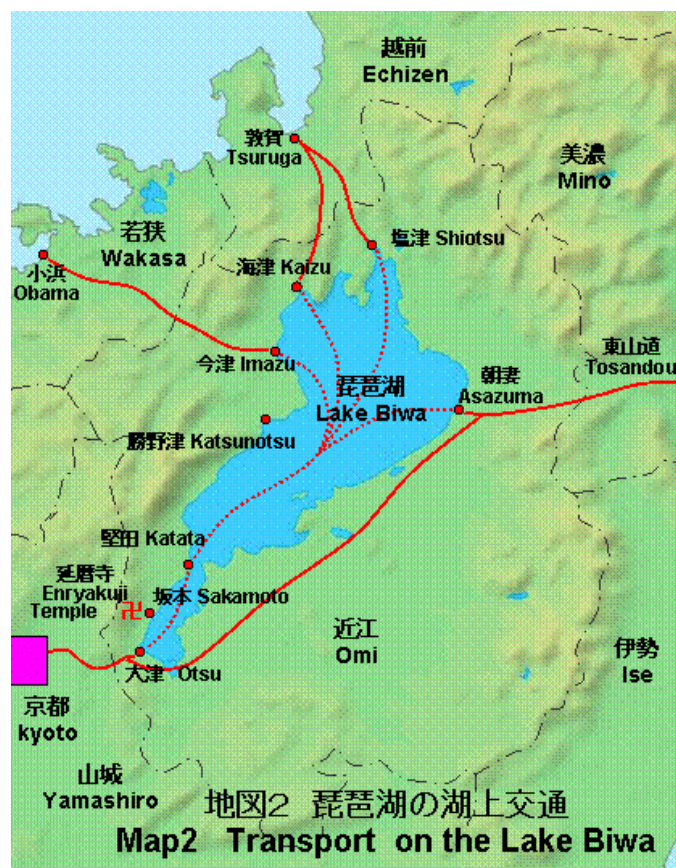
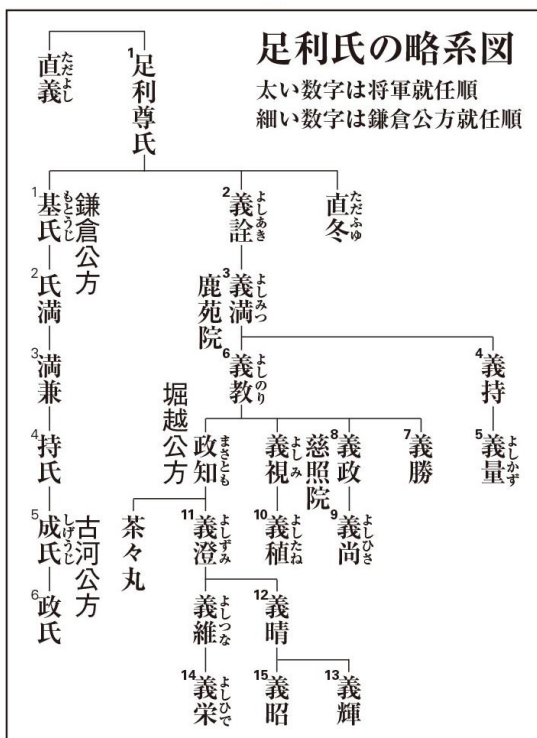
◎文明4年2月、山名宗全が西軍諸将に東軍との和睦を提案⇒決裂。（『大乘院寺社雑事記』）

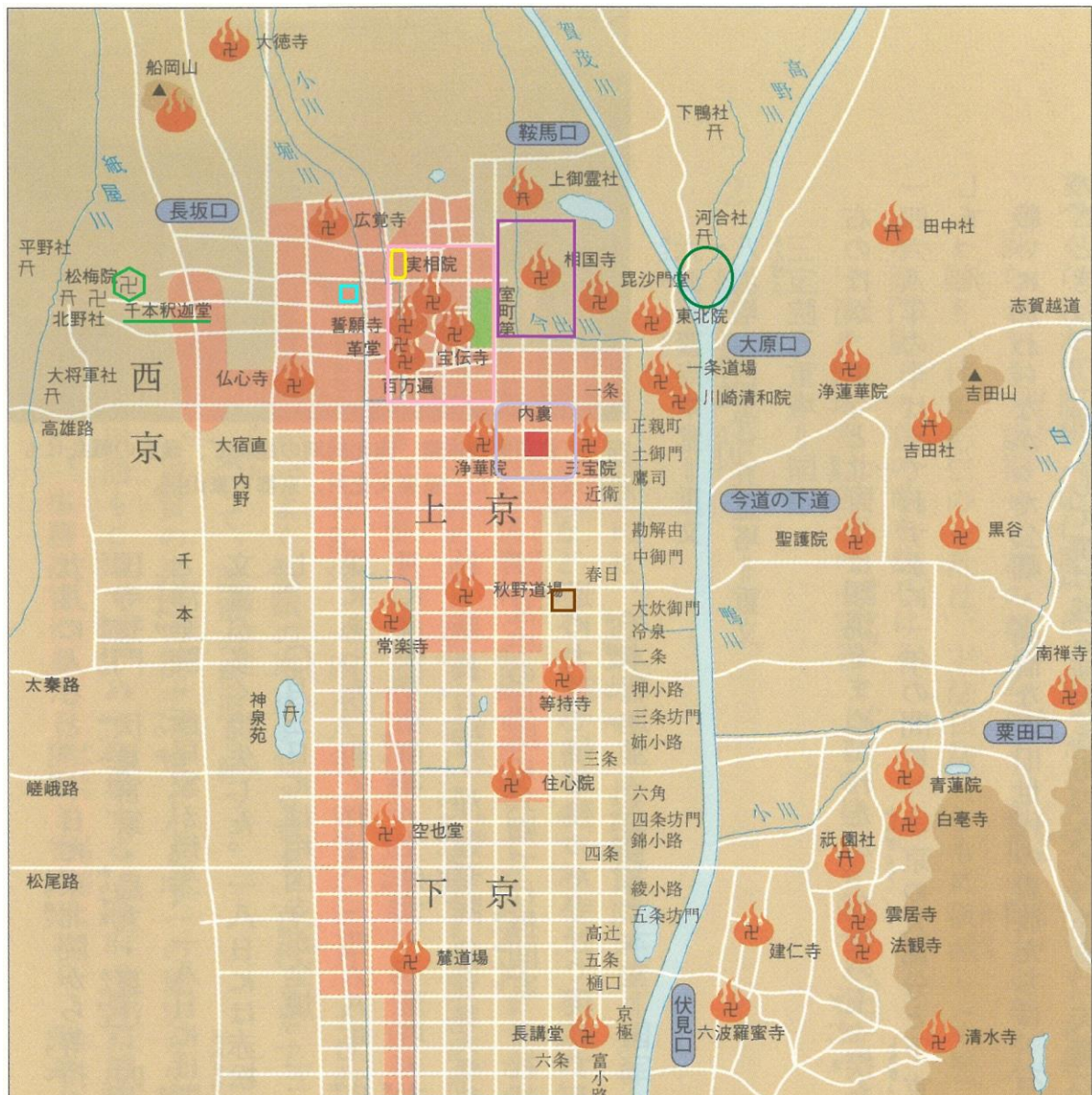
同年3月、細川勝元が養嗣子勝之を廃し、宗全の孫にあたる政元を後継者に決定。（『雑事記』）

☆山名宗全の切腹未遂事件

◎文明4年5月に山名宗全が切腹未遂、8月に孫の政豊に家督を譲る←和睦交渉失敗の責任を取る？

◎文明5年に宗全と勝元が相次いで死没。翌年、山名政豊と細川政元が和睦。政豊は東軍に降伏。





主要参考文献

- 家永遵嗣「軍記『応仁記』と応仁の乱」学習院大学文学部史学科編『歴史遊学』山川出版社、2001年
- 同上「再論・軍記『応仁記』と応仁の乱」学習院大学文学部史学科編『〔増補〕歴史遊学』山川、2011年
- 同上「足利義視と文正元年の政変」『学習院大学文学部研究年報』61、2014年
- 伊藤大貴「応仁・文明の乱と山名氏」『日本史研究』660、2017年
- 川岡勉『山名宗全』吉川弘文館、2009年
- 桜井英治『室町人の精神』講談社、2001年
- 末柄豊「応仁・文明の乱」『岩波講座日本歴史』第8巻、2014年
- 早島大祐『足輕の誕生』朝日選書、2012年
- 山本隆志『山名宗全』ミネルヴァ書房、2015年

[illegible]